【観戦記】２０２５硬式野球部・夏

準決勝は５回コールドで敗れたが、ゲームセットの礼を終えベンチに引上げてくる選手には笑顔があった。ここまで快進撃を見せた高高硬式野球部の夏が終わった瞬間だった。

１回戦は苦戦を強いられた。相手の群馬高専は直近の関東信越地区高等専門学校大会で１回戦小山高専に勝ち、２回戦で優勝した木更津高専に４－１１の試合をしていた。日頃あまり交流のない高専は格下に見られがちだが、秋の新人大会も春季大会も１回戦で対戦相手と接戦を演じていただけに油断はできないと感じていた。案の定、高高は序盤から残塁を繰り返し、逆に群馬高専は４回に先制すると効率よく加点し、６回を終わった時点では１－４と完全に群馬高専ペースになっていた。試合が動いたのは７回裏、一死後、二人が安打を重ねると相手投手が降板し、ここから反撃開始。７回に３点を入れて同点に追いつき、８回に２点を加え逆転。辛くも６－４で勝利し、城南球場に詰めかけた応援団を安堵させた。

２回戦は会場を桐生市に移し、小倉クラッチスタジアムで市立太田高校との対戦となった。第１試合で前橋高校が館林高校に勝利を収めていたため、「待ってろ前高」とばかりに、２回戦は負けられない一戦となった。気候が良かったこともあり、試合は序盤からエラーの少ない引き締まった試合となり、５回を終わって０－０。７回にタイムリーと犠牲フライから２点を先制した高高が、９回には打線が爆発し終わってみれば１－８の完勝であった。次戦は夏休み初日、城南球場に戻って前高との伝統の一戦となるが、この時点では伝統の一戦がまさか伝説の一戦になるとは誰も予想していなかった。

３回戦。試合前からマスコミやＳＮＳで「ライバル対決」「２３年ぶり対決」と煽られ、試合に集中したい選手からすればいい迷惑であったかもしれないが、外野は大いに盛り上がっていた。当日は、第１試合に好ゲームが予想される桐生第一と商大附の対戦が組まれていたこともあり、試合前から城南球場は異様な熱気に包まれていた。第１試合のグランド整備のあたりから外野の芝生席に、前高、高高両校の応援団が入り始め、バックスクリーン近くまで観客が埋まり始めた。第１試合が終わると、バックネット裏で両校の応援団長（高高は部長）が挨拶を交わし、一塁側（前高）も三塁側（高高）も応援席は超満員。考えてみれば定期戦は関係者しか見ることができないが、夏の高校野球は入場料さへ払えば誰でも観戦できる。久々の定期戦ということで球場に足を運んでいただいた同窓の方も大勢いらっしゃったようだ。

２回戦の戦いぶりから投手戦のロースコアが予想されたが、試合は意外にも１回から点を取り合う展開となった。１回の表に前高が１点を先制すると、すぐさまその裏の攻撃で高高が１点を返し、２、３回と追加点を奪った高高が序盤は試合を有利に進めた。一方の前高は４回、２アウトから５者連続安打で３点を奪い逆転。前高１点リードのまま試合は終盤に入った。７回裏、１点を追う高高は二死１塁からツーベースヒットが生まれ、相手守備の乱れに乗じて１塁ランナーが生還、同点に追いついた。そのまま回は進み９回裏、「イケイケ　タカサキ」の応援に後押しされて、ヒットと内野安打に相手のワイルドピッチもあり、高高は無死１、３塁。一打サヨナラのチャンス（前高はピンチ）に前高は敬遠し満塁策を選んだ。後から考えると、ここが１つ目のドラマであった。無死満塁のサヨナラのチャンスに高高応援席はチャンステーマで大いに盛り上がり、一方の前高は多くの人が両手を合わせ祈っていた。ここで高高がピッチャーゴロのホームゲッツー、次の打者も三振に倒れ、絶体絶命のピンチを前高は見事に凌ぎきった。敵ながらアッパレと大いに感心するも、観客席からは深いため息がこぼれていた。

ここから流れは完全に前高ペース。タイブレークに入った１０回表、前高は変わったばかりの高高ピッチャーに襲いかかり、あれよあれよと言う間に大量４点を奪い、試合は決したかに思われた。しかし、野球に詳しい専門家に言わせると、前高が４点奪った後の一死１、２塁で、高高のピッチャーが一塁ランナーを牽制で刺したのが大きかった。あれで流れはまだ前高ではないと感じたそうだ。

１０回裏、選手治療によりしばしの中断があり、その間、試合は決したと球場を後にする方も散見された。正直、高高応援席にも諦めムードが漂い、健闘した選手達にどんな言葉を掛けるか思案していた人も少なくない。それを払拭するかのように、再開後、レフトへのタイムリーヒットが連続し、得点は６－８。高高スタンドは大いに湧き、なおも無死１、２塁の状況から「もしかして」の思いが頭をもたげてきた。次の打者が三振に倒れ、続くバッターが四球で一死満塁。次のバッターの三塁内野安打で守備がもたつく間に二者生還。８－８の同点に追いつき、高高観客席のボルテージは最高潮に達した。続くバッターが倒れ、二死１、３塁。打順は１番に帰り、０－２からの３球目。低めのボールに合わせるようにバットが出て、ふらふらっと上がったボールはライト前にポトリ。３塁ナンナーが生還し、高高が９－８で大逆転勝利を収めた。「野球とは筋書きのないドラマである」とは誰が言ったのか忘れたが、スタンドは誰彼となく抱き合い、涙を流しながら勝利の雄叫びを上げていた。

準々決勝は第二シード桐一に勝利し、２１年ぶりのベスト４進出。準決勝は５回コールドで敗れたが、ゲームセットの礼を終えベンチに引き上げてくる選手には笑顔があった。ここまで快進撃を見せた高高硬式野球部の夏が終わった瞬間だった。

たしかに準決勝のスコアだけを見れば、「力の差があった」と評されるかもしれない。しかし、それまでの４試合、高高の選手たちは粘り、逆境を跳ね返し、最後まで諦めない野球を見せてきた。そのひたむきな姿勢に、多くの観客が心を動かされた。そして何より、選手たち自身がそれぞれの場面で自分の力を出し切ったという実感があったのだろう。ベンチに戻る彼らの表情には、清々しさすら漂っていた。

この夏、高高硬式野球部は記録ではなく、記憶に残るチームになった。あの劇的な前高戦、まさに伝説の一戦は、応援した者すべての心に刻まれたはずだ。最後まで仲間を信じ、野球を楽しみ、全力で戦い抜いた選手たち。その姿勢こそが、観る者に勇気や希望を与えてくれた。グラウンドに別れを告げ、スタンドに一礼したその瞬間、高高球児たちは間違いなく、ただの「高校生」ではなくなっていた。彼らが残したドラマは、この先の人生の糧となり、また後輩たちへと語り継がれていくだろう。

ありがとう、高高球児。君たちの夏は、間違いなく「熱かった」。